

京都における歯科医学の

先覚者たち

浦田耕作

京都の口中医あるいは口歯科医は、丹波兼康及び丹波親康に始まるとされている。

丹波兼康の屋敷跡は、今日も、なお、兼康町の町名が残り、それに隣接した町に、丹波親康（現姓・親康氏）邸が残っている。徳川幕府の医官となった兼康家の人々は、家康の康の字を用いるのを避けて、金保と改め、口中医と共に本道（内科）をも行い、更に、多紀氏と姓を改め、躰寿館を創設するなど、医学教育にも大きな足跡を残した。

親康家は、代々京都にあって、口中医を続け、明治以後は、内科医となり、当主庸（いさを）は、内科の女医であられたが、昭和五十六年七月三十一日に亡くなられ、誠一氏があとを継いだ。

貞享二年（一六八五）刊の案内書「京羽二重」によれば、

諸師・諸芸の部に「口中医師」として、小川通元誓願寺上の町法眼親康喜安と油小路一条下る町法橋野々口孝雲の名が見られる。

天保二年（一八三二）の「商人買物独案内」には、大名や医師の名は示されず、薬種屋に続いて、「歯工家」と「男女御入歯師」の案内が掲載されている。

これらの文献より推測すれば、江戸時代の口中医及び口歯科医は「諸師」の中に、御入歯師や歯工家は「諸職」の中に、含まれて分類されていたようである。

江戸時代の口中医あるいは口歯科の治療方法は、宝永七年（一七二〇）刊の「医道日用重宝記」をはじめとする諸種の診療ハンドブックによれば、含嗽薬・塗布薬・内服薬が主体で、鍼・抜歯・小外科手術も行なわれていたようである。

明治維新後、医師であり本草学者であり舎密家でもあった明石博高や江馬天江（時代考証の権威故江馬務先生の祖父君）らにより、京都の医療制度の近代化が行なわれた。

京都に、欧米の近代歯科医学にもとづく歯科医療を導入したのは、渡辺晋三と太田吉三郎の二人で、共に横浜にお

いて、ボストンの歯科大学を卒業したアメリカ人歯科医ハ
ラック・マンソン・パーキンスに、明治十一年より明治十
三年まで師事し、明治十二年五月に歯科医術開業試験に合
格し、明治十三年五月江馬天江の招きで、京都に移り、開
業したものである。

渡辺晋三は、美作勝山藩の家老渡辺政の長子で、弘化元
年勝山に生まれ、藩主三浦玄蕃頭の近侍を経て江戸で漢学
を学び藩校の助教となり、廃藩後、東京に移り、司馬遠湖
のもとで漢学を学び、更に、パーキンスのもとで歯科医学
を学んだとされている。その後の継続的な調査の中で、洋
学あるいは漢方医学についての相当な知識人でもあったよ
うであり、更に、資料を収集し、裏付けを得たい。

渡辺晋三が、京都に招かれた背景については、司馬遠湖
と江馬天江の交友関係によるものようである。

渡辺晋三と太田吉三郎が、京都で近代歯科医学による歯
科医を開業した場所は、中京区柳馬場姉小路上る八幡町
(現在の柳八幡町で柳馬場御池下の東側二軒目)であり、江馬天
江邸と背中合せの、しかも、江馬天江の所有する借家であ
った。昭和五十五年まで、渡辺歯科医院の跡は、俳優黒川

弥太郎邸としてほとんど原形を止めていたが、その後、都
市再開発の波の中で、ビル化され、もはや面影を見ること
は出来ない。

渡辺晋三の長男^{わたる}済も、また歯科医で、柳馬場通二条上る
に開業されていたが、十数年前に亡くなり、継子はなく、
いと子未亡人のみのご健在である。

渡辺晋三・済の資料のほとんどは、勝山町公民館に寄附
され、大切に保存されている。

明治十二年五月に、渡辺晋三が歯科医開業試験を受験す
るに当ってパーキンスが発行した英文の修業証書は、いと
子未亡人のもとに保存されている。その証書には、ハラッ
ク・マンソン・パーキンスの署名と共に、後に大阪府歯科
医師会長となった西村輔三(兵庫豊岡市今森出身・アメリカ
で商事を研究し、帰国後パーキンスの通訳兼助手)の署名が見
られる。

渡辺晋三の門下は、ほとんどが親族で、故木田文夫日本
医大教授の父君木田廉平もその一人である。

太田吉三郎は、大分県の出身で、後に(年月日未調査)大
阪に移り開業。明治二十三年奈良県旧柳本藩土堀内家を継

ぎ堀内清頭と名を改めている。

共に、明治二十年ごろ歯科医術開業試験委員に任ぜられ、渡辺晋三は歯科医療倫理の確立に、堀内清頭は歯科材料の研究に、数々の貢献をしている。

幕末の口中医あるいは口歯科医のその後については、今後の調査・研究にまきたい。(文中敬称略)

(京都市)

欽明朝に來日したイラン系の医師 王有悛陀について

伊^①藤 義 教
松^②木 明 知

奈良朝に來日した李密醫は、「醫」の字が付されていることから、従來醫師とされてきたが、「醫」は「醫」の誤りであり、これは中世ペルシャ語の *Ranjār* の写音であり醫師とは言えない。

日本書紀によれば、欽明天皇十四年(五五三)百濟に対して醫博士、易博士などの來日を要請したが、百濟はこれに應えて翌十五年(五五四)二月易博士王道良、曆博士王保孫、醫博士王有悛陀、採葉師潘量豐、丁有陀、樂人三斤以下四人が來日した。

この中に名前が中世ペルシャ語で解説出来るものがあり、醫博士王有悛陀以下がそれである。

すなわち王有悛陀は中世ペルシャ語の *Way-ayārid* また